



一行は赤いエリートたち

警察の胡耀邦・中国共産党総書記の来日が実現した。二十五日の国全演説をはじめ二十六日の「青年の集い」に出席し、日中友好の必要性を強調する。あいにく、わが国は総選挙まじりのあわただしい時期になってきたが、中国側としても、この冬からいよいよ始まる「整党」を前にして、その最高責任者（中央整党工作委員会主任）でもある胡耀邦総書記が八日間も北京を空けるのは並々ならぬことであろうから、日中間の自身の深い対話を大いに期待したいものである。

東外大教授

中嶋 嶺雄

胡耀邦総書記を迎えて考える

よつには中国との関係を形成できなかったろう。経済大国日本だからこゝろである。

中国としては、このような日本を無視して西側諸国を語れるはずもないが、むしろ今回の胡耀邦氏一行来日で特筆すべきことは、当の胡耀邦総書記をはじめ、随員首席の呉學謙外相、同席二位の王兆國・共産主義青年団中央第一書記ら鄧小平〓胡耀邦系統で主要メンバーが固められていることだ。かれらはいずれも共産

日中御祝儀外交には疑問



主義青年団出身の「赤いエリート」で、よりオーソドックスな社会主義者・共産主義者であって、そもそもわが国のような西側資本主義国とは、もっとも遠い地点にあるリーダーたちである。

それは、このところ中国共産党が連日のように、資本主義による「精神汚染」批判のキャンペーンを張っているからである。いわゆる「開放政策」の過程で、社会主義中国の矛盾や問題点を鋭く指摘することを中心して歓迎していた観のある『人民日報』の胡錫楙社長や王若水・副編集

いずれにせよ、中国共産党の最高指導者が初めて資本主義国を訪れるというのに、その背後で党の機関紙や党幹部が一斉に資本主義による「精神汚染」を糾弾するという光景は、やはり尋常ではない。しかも、いよいよ、鄧小平最後の賭け、として始まる「整党」にかんじて、中国共産党の「整党」についての決定（一九八三年十月十一日）に照らし

ていえば、「党内に『三種類の者』すなわち、林彪・江青反革命集團に

いまだ大きな山場を迎えるところだといえよう。

一方、中国をめぐる国際環境も大きく変化してきている。中ソ関係改善への動きは、まさに胡耀邦総書記らの主導によって一歩また一歩と着実に進んでおり、すでに中国の指導者はソ連を毛沢東時代のように脅威とは見做していない。そのような対ソ認識に基づく中国の世界戦略の転換によって、中国は現在、米ソの中間に立つようになってきているのだが、過般のアメリカ海兵隊による対グレナダ作戦では、今回来日した呉學謙外相や齊懷遠・中国外務省報道局長もアメリカを「覇権行為」だと激しく批判していた。

また中国はランゲン爆殺事件以降の米・日・韓連携による対北朝鮮政策についても警戒的になっているばかりか、レーガン大統領の訪韓をも厳しく批判しはじめている。日本政府の対北朝鮮制裁措置に対抗して北朝鮮が対日報復を発表（十一月十八日）したときに、昨年四月の隠密訪朝によってビョンヤン（平壤）と北京の間をめぐらした当事者でもある胡耀邦氏が、わが国の立場を理解を示すことも困難であろう。

こうして見てみると、胡耀邦訪日の背景は、内外ともにきわめて厳しいといわなければならない。それだからこゝろ今回は、二十一世紀の日中関係を語り、未来を担う青年との交流を目指すというのであろうが、前任の華國鈺氏の来日が日中関係に何を残したのかを想うにつけても、日中御祝儀外交で熱誠歓迎とはかりいってもいられないような昨今だといえよう。

主観青年団出身の「赤いエリート」で、よりオーソドックスな社会主義者・共産主義者であって、そもそもわが国のような西側資本主義国とは、もっとも遠い地点にあるリーダーたちである。

精神汚染批判にどう響く

この点では、わが国の眩いばかりの繁栄を目のあたりにして、かえって強い反撥を誘い、その結果、「資

長も先日更迭され、中国共産党の「文化官僚」として辣腕をふるった周揚・中国文学芸術界連合会主席さえ、「社会主義の陳外（異化）」を認めたカドで「自己批判」に追い込まれている。他方での異常なまでの鄧小平礼讃や犯罪者の見せしめ大量処刑などとともに、なにか文化大革命の胎動期を思わせさせる最近の雰囲気だといえよう。

追隨して造反によってのしあがった者、派閥意識のひどい者、毆打・破壊・強奪分子がまた残っている。こゝろこそ、「整党の必要性と緊急性」だといつのである。とくに「四人組」粉砕以後も陰に陽に派閥活動をつづけている者」すなわち旧文革派を地方末端にいたるまで徹底的に洗い出して一掃することが当面の「整党」だといつたから、中国内政は

雪崩が目のあたりにして、かえって強い反撥を誘い、その結果、「資

追隨して造反によってのしあがった者、派閥意識のひどい者、毆打・破壊・強奪分子がまた残っている。こゝろこそ、「整党の必要性と緊急性」だといつのである。とくに「四人組」粉砕以後も陰に陽に派閥活動をつづけている者」すなわち旧文革派を地方末端にいたるまで徹底的に洗い出して一掃することが当面の「整党」だといつたから、中国内政は